慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	渡辺, 秀樹(Watanabe, Hideki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.197- 198
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0197

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

渡辺　秀樹

私の拙い小冊子が、畏友 三隅一人氏による書評を得たことに感謝したい。本書は、筆者の大学院時代から時間を追って研究歴を記し、ときに研究内容について簡単に紹介するという構成で、そのために全体としての体系性が明示されていないとも言える。三隅氏は、謎（パズル）を解くというかたちで、評者の立場から読みとれる拙著の意味や問題を真摯に指摘された。

筆者自身も、顕示的には意識していなかった検討すべき課題が整理され提示されている。小室直樹的機能分析やマートンの中範囲の理論に依拠し参照しながら実践して来た自らの社会学的方法とはなんであるかをあらためて省みるという機会を与えられた。

評者によるふたつの謎解きは、どちらもその通りということになるだろう。三つ目の謎は解くべきヒントが不足しており、もっと書き込むよう求められている。このリプライは、それに答えられるだろうか。搦め手の答え、あるいは比喩的な答にしかならないかもしれないが、その一端を記すこととしたい。

謎解きの第 1 は、本書のタイトルは『モデル構成から家族社会学へ』であるが、それは研究の時間的な推移、つまり前者から後者への変化を表す（一見、そう読める）というより、「モデル構成に立脚した家族社会学というべきものであろう」（傍点評者）という。おそらく素性が＜モデル構成＞であることは隠しようがなく、＜家族社会学＞という前線において、素性を常に引きずって来たのでその通りと応えるしかない。そのことでよいこともあれば失敗もある（あった）と思う。素性を土台と言い換えれば、土台が無い議論はおもしろくないし土台に溺れるのもよくない。土台は奥ゆかしいのがよく、少し見透かせば，あるいは表面を少し洗い流せば土台が見えてしまうのもよくないと思う。土台が豊かで前線で取り組む現実の問題が豊かで、そして両者が適切に噛み合っているのが、やはり理想と思う。

謎解きの第 2 は、どのような経験を踏まえて自らの社会学的方法に至るかというものである。評者は、拙著に示された研究者としての＜周辺＞あるいは＜第 2 次社会化＞に深く関わる時代や研究環境を示唆する。この謎解きにたいしても否定する理由は無い。そのように読めば、研究歴における出会いやエピソードなどが雑多に書かれた拙著も多少の意味が出てくると言ってくれているのだと思う。あるいは雑多なエピソードから社会学的な意味を汲み取る感性の大切さを指摘してくれているのだと思う。

第 3 の謎解き、すなわち筆者の方法の獲得に至った由来や困難について、情報が足りないという注文に関しては、あらためて考えてみた。

退職後に暇になったらのんびり読もうと思って書棚においてあるのが、E. シェリーの『周期表—成り立ちと思索—』（2007、馬淵久夫ほか訳、2009、朝倉書店、科学史ライブラリー）で

渡辺秀樹「著者リプライ」
『三田社会学』第 20 号（2015 年 7 月）197-198 頁

ある。まだのんびりできる状況となってはいないが、謎解きに関係するかもしれないと思う。

いっぱしの理系少年にとっては、メンデレーエフの元素の周期表の物語に出会うという経験は大きな衝撃ではないだろうか。それを少年時代の知的興奮のひとつとしている人は多いと思う。＜補助線を引くこと（幾何）＞や＜球面を平面にする地図投影法＞などもおもしろいが、それらよりもインパクトは大きかったように思う。シェリーの書でも紹介されているオリヴァー・サックスの『タングステンおじさん；化学と過ごした私の少年時代』（2001、斉藤隆央訳、2003、早川書房。16 章「メンデレーエフの花園—美しき元素の周期表」）は、そのことを活写している。メンデレーエフは壮大なパズル解きに取り組んだのだ。まず、いくつかの元素の間にあるパターン（規則性／周期性）を見出す。次にはこのパターンが支配する元素は他に広く存在することを予言し、その予言にしたがってあらたな元素の発見に向かう、そして予言通りに元素が発見され、周期表にその位置を見出すという物語である。

オリヴァー・サックスの言葉を引用しよう。「周期表は、途方もなく美しかった。それまで私が見たどんなものより美しかった。けれども、自分が何をもって美しいと感じているのか、私にはちゃんと確かめられなかった。単純さ？　統一性？　リズム？　必然性？　あるいは、全部の元素がきっちり居場所に治まり、空席はなく、例外もなく、すべてがほかのすべてを示唆しているという対称性や全体性かもしれなかった」（訳 242 頁）。「‥‥12 歳の私は一種の恍惚感を味わった」（同、250 頁）。サックスはまた、C. P. スノーの反応が自分と非常に似ているとして紹介する。「そのとき初めて、雑多な事実の寄せ集めがすっきりと秩序だって見えた。少年時代にならったばらばらの無機化学の知識がすべて、目の前で組織化されて見えたのだ。まるで、ジャングルのそばにいて、不意にそれがオランダ風の庭に姿を変えたかのように」（同、250 頁）。

このような経験が、雑多な事実の寄せ集めを社会学的な秩序に組み上げようとする営為の（かつての理系少年の方法的）基底となっているのかもしれないと思うのだが、説得的なリプライになっているだろうか。

与えられた文字数は尽きたが付言すれば、＜科学的思考の社会化＞だけでなく、社会化全般にとっての重要な示唆は、サックスの書のタイトル『タングステンおじさん Uncle Tungsten』が表している。すなわち、社会化における重要な他者は、このナナメの関係、すなわち＜社会的オジ social uncle＞の豊かさにあることが確認できる。それは先の第 2 の謎解きに繋がる。

（わたなべ　ひでき　帝京大学）